

日本庭園学会ニュース

The Academic Society of Japanese Garden News

NO. 100

令和元年(2019年)

日本庭園学会ニュース 100号記念

発行 日本庭園学会(会長 佐々木邦博)
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学 地域環境科学部
造園科学科 庭園文化研究室内
TEL(03)-5477-2430(鈴木誠研究室)
<http://www.soc.nii.ac.jp/asjg/>

令和2年度日本庭園学会全国大会開催案内

令和2年度の全国大会は、福井県福井市にて、「発掘庭園の保存と活用」をテーマに実施することになりました。詳細は、本誌次号にてお知らせします。

記

■日程

令和2年6月20日(土)～21日(日)

■内容

令和2年6月20日(土)

午前・午後 研究発表会、総会、学会賞受賞者講演会
夕方 情報交換会 18時～20時頃

令和2年6月21日(日)

午前 現地検討会
午後 公開シンポジウム

「発掘庭園の保存と活用」(仮題)

■会場

研究発表会、総会、学会賞受賞者講演会

福井市郷土歴史博物館

(JR福井駅下車徒歩12分)

情報交換会 未定(福井駅徒歩圏の会場を予定)

現地検討会 特別名勝一乗谷朝倉氏庭園・福井県立一乗
谷朝倉氏遺跡資料館、名勝養浩館庭園(、丹藏洞)

公開シンポジウム

福井県立図書館

(無料バスあり:JR福井駅前発15分間乗車)

■参加費

学会員 2,000円

非会員 4,000円

※ 学生は、会員の場合は500円、非会員の
場合は1,000円とします。

※ 上記金額に資料代、現地検討会の入場料及び
バス代を含みます。

※ 大会参加費は、1日のみの参加でも上記金
額を徴収します。

※ 公開シンポジウムのみの参加は無料ですが、
資料をご希望の場合には1,000円いただ
きます。

情報交換会 6,000円程度を予定

■宿泊先候補のご案内

主要なホテルは以下の通りです。ご予約はどうぞお早
めに、会員各位にてお願いいたします。

・ホテルルートイン福井駅前

・東横INN福井駅前

・福井マンテンホテル駅前

・福井フェニックスホテル

・ホテルフジタ福井

・天然温泉羽二重の湯ドリーミーイン福井 などなど

日本庭園学会 2019 年関西大会（山口）現地検討会レポート

植彌加藤造園株式会社 阪上富男

本大会の初日、二日目の午後に行われた現地検討会は、山口市の文化財庭園を活動実績と共に文化財保護課の佐藤力主幹よりご説明頂きました。

大正 15 年史跡名勝指定、常栄寺庭園は 29 代大内政弘が命じた伝雪舟の庭園です。三方を山に囲まれた谷地形を利用し、奥に枯滝、中央に池を設け、庭石を配した雪舟の山水画のような庭園は、鬱蒼とした周辺樹木の整備や浚渫などが行われ、旧建築や視点場と共にご説明を頂きながら庭園を巡りました。山からの水に対応した庭園奥に隠れる二つの池や周辺地形、排水経路にも奥深い工夫が感じられました。

蔵目喜鉢山の発展と共に歴史を刻んできた伝雪舟、常徳寺庭園は調査により鍾乳洞の霊水の取り入れ、室町後半期に遡る作庭等が判明し、近世初頭の優れた作庭として平成 12 年名勝指定となりました。迫力ある岩盤削り出しの滝石組みの景色とは、程遠い調査前の写真を見ながら、調査の概要をご説明頂きました。

中世の周防山口を拠点に栄えた大内氏の館跡、昭和 34 年指定「史跡大内氏遺跡附凌雲寺跡」をご案内頂きました。発掘遺構を埋め戻し、嵩上げて復元された池泉庭園と、復元整備が行われた実物展示の枯山水庭園をご案内頂き、一定方向のみ焼けた石や喪失跡に据えられた、墓地内 2 m に及ぶ立て石のエピソードは、とくに面白く感じられました。

大正中期、実業家の別荘として建設、昭和に入り表千家の茶室に深くかかわる笛吹嘉一郎が増築した山水園は有形文化財の建築物と、池泉・枯山水・露地を持つ登録名勝の庭園を有します。多くの貴重な資料をご用意頂き、「石 1 つに意図があり、動かさせません」とのことばが胸に響き、温泉の湯を流された池泉での心温まるご案内に感銘を受けました。

「私の遊び」とおっしゃる玄関前の湯の落ちる手水も含め、細部までこだわりが感じられる作庭は、施主へ、みる者へ伝わることを実感し、ただただ感嘆の一言に尽きました。

「史跡大内氏遺跡附凌雲寺跡」の凌雲寺跡は 30 代大内義興の菩提寺で、了庵桂悟が開基と伝わります。大内氏滅亡後、廃寺となり、見渡す限り棚田が広がるなか、当時の威容を彷彿とさせる惣門跡と称する石垣が残ります。我々が見やすいよう、この広大な地を下草刈り頂き、お出迎え下さった当地の方々のご苦労とお心遣いに頭が下りました。

今まさに文化財の保存と活用が課題となっていることと共に、そこに関わる人たちの想いを痛感しました。また、皆さまと交流することで新しい気付きや見識、感覚は有難く、ここでしか味わえない一時を過ごす事が出来ました。

貴重な機会を賜り、本大会をお支えくださった多々良様、関係者の皆さまにあらためて御礼申し上げます。



史跡名勝常栄寺庭園



登録名勝山水園庭園

学会ニュース 100号記念 歴代会長が語る「庭園学会の将来」

日本庭園学会の発展に期待して

中島 宏 (公益財団法人都市防災美化協会)

日本庭園学会ニュース 100号、おめでとうございます。

日本庭園学会の将来像とはどんな姿・・・？

日本庭園学会の50年後には、会員が1万人となり、文化勲章受賞者が誕生し、外国にも支部がおかれ、人種や言語の違う人々と盛んに交流しています・・・。

この将来像は、庭園学の発展にとってはたして夢物語でしょうか。

歴史を振り返ってみますと、地球上で最も強いとされていた恐竜が滅び、ネズミのような小さく弱い動物が生き残り、やがて現在の人間に進化してきたと言う史実・・・。このことを思い出してみてください。

庭園学会の未来のためには、将来の目標に向かって短期的目標、中期的目標を定め、学会員が連携し、ワンチームとして動いていくことが重要です。

短期的目標では、まず、委員会ごとに策定した年間計画の進行管理を定期的に行い、実績とのズレを委員全員で共有し、速やかにその原因を取り除く方法を検討することが必要です。

例えば、委員相互間の打合せは、どこにいても行えるよう事前に日時、テーマ、時間数等を定めておいて、パソコンの画面を通して行うことを勧めます。委員全員でチェックするシステムが困難の場合には、現状の組織と人材の課題を抽出し、理事会でその対応策を検討してはいかがでしょうか。

次いで、現在の厳しい社会・経済の情勢下で、新しい人材の発掘と会員の満足度を高めるため、現体制や固定観念にとらわれない、より高い目標を定めて年間計画を作成し実行することから、協会の発展が始まることを心がけて欲しいものです。

今後、学術の多様化や少子高齢化などに伴って、本学会においても組織や人材の現状を維持することさえ危ぶまれる時代が、早晩やってくると予測されます。

また、一般市民に学術学会として評価され支持されることを意識することも忘れてはならないことです。そのため、中期的目標としては、国内外の会員の増加や活性化のある学会、協会を参考にして、研究者の見解や領域を飛び出し、新たな発想の転換を図り、新しい時代に対応した方策や、若手会員の育成・活用を促進する体制を準備し、未来の本学会の目指すべき姿を提唱して欲しいものです。

例えば、最近、飲み会で友人に誘われて行った所が、近畿大学水産研究所の東京・銀座店でした。若い女性が長い列をなす盛況の店を大学が経営している発想に驚くと同時に、東京・築地本願寺でも、宗教に関係なく誰でも参加できる講和会や食事ができる食堂を運営していることを知り、発想転換の事例として考えさせられました。本学会においても活性化策として、資格試験(庭園管理運営士、庭園ガイド1級、2級)や学習塾等を実施することにより、社会の評価、学術の発展、財政の補填などを得ることができるとともに、世界大会や世界組織を実現できるのではないのでしょうか。

「明日に向かって立つ」意気込みさえあれば、学会の将来像は決して夢ではないと信じております。

最後に、学会の発展が、皆様の庭園学のさらなる発展に寄与することを祈念申し上げます。



庭園学の将来

藤井 英二郎 (千葉大学園芸学部 名誉教授)

庭園に関わる術語や庭園の分類、様式、また考古学的発掘によって明らかになった庭園の実態と現存する庭園の関係などについては、現在、検討中の『日本庭園大事典』(仮題)に託すことにし、ここでは気になっている課題をいくつか挙げ、関連する研究が進むことを期待したい。

一つ目は、施主と作庭者の関係である。例えば、旧徳川昭武庭園(戸定邸庭園)では、『戸定邸日誌』などで詳細な作庭過程がわかり、その一つ一つに昭武の判断や指示があったと推測できる。それに対して、旧堀田正倫庭園は東京・巣鴨の庭師・伊藤彦右衛門による設計図が残り、その図に描かれたとおりの構成が明治26年銅版画や現況に見られ、正倫の指示が確認できる記録は見つかっていない。つまり、戸定邸庭園は施主・昭武の設計であり、施工は銀治郎や與八などの庭師である。一方、正倫庭園は正倫が施主、設計は伊藤彦右衛門、施工は彦右衛門や地元の庭師である。このような観点で多くの庭園の施主と作庭者の関係が確認できれば、設計意図や意匠・施工技術の特徴がより明確になると同時に、施主の人物像まで探ることができる。

二つ目は、庭石や庭木の表裏の判断の起源である。施工現場で庭石の表裏の判断が分かれることはまずない。石の表裏の識別がいつ頃から始まったのか。筆者は、もう10年以上になるが、群馬県渋川市の滝沢石器時代遺跡の整備に関わり、また発掘された縄文時代の敷石住居をみると、石の表裏が識別されているように思える。では、庭木の表裏はどうか。どうして表裏を認識するようになったのか。石であれば、歩きやすさや土留めなどの機能が表裏の認識に展開した可能性も考えられるが、樹木ではそうした機能的背景は考えにくい。大分前になるが、日本人の玄人と素人で樹木の表裏の識別と、識別中の眼球運動を測定したことがあった。表裏の判断結果に玄人と素人の違いはなく、違いは目の付け所であり、判断に要した時間であった。

三つ目は、海外の日本庭園、とりわけ日本人以外の方が設計・施工・管理に関わった庭園の特徴分析である。

40年近く前にカナダ・トロントの日本庭園で島の中央に据えられた灯籠や、アメリカ・ミズーリ州で地面のほとんどが芝生で覆われている日本庭園を見て、彼の国々の人々の空間や地面の捉え方が垣間見えたと思ったことが、この問題意識の発端である。

今年9月にワークショップが行われたフランス・モレブリエ東洋庭園では、庭園全体の構成方法の違いも実感させられた。モレブリエ東洋庭園は、1899～1913年に日本の日本庭園を見たことがない建築家アレキサンダー・マルセルによって整備されたとされる。高台に建つシャトーから西南に延びる谷筋を流れる小川を堰き止めて大きな水面を造り、その先の谷筋を跨ぐ鉄道橋や橋の背後に沈む夕陽をシャトーから望み、それらが水面に映える俯瞰景が明確な景観軸になっていた。それは、あたかもパレスからグランカナルの先に沈む夕陽を望むヴェルサイユ庭園の東洋版である。このように、外国の方々が関わった日本庭園を分析することで、日本人の手にかかる日本庭園の特徴がより明確になる。



戸定邸庭園

日本の庭園学の将来 ～地域性・国際性から一般市民社会への展開

鈴木 誠 (東京農業大学造園科学科 教授)

「学会創立 20 周年を迎えて」(平成 24 年(2012) 6 月)というタイトルが、学会長就任時の私のごあいさつでした。平成 4 年(1992) 6 月に正式発足した日本庭園学会は、令和 2 年(2020) 6 月に 28 周年を迎えます。そろそろ理事会・総会等にて 2 年後の、30 周年記念事業企画をスタートすべきかもしれません。

さて、学会長就任時の誓いは「学会将来ビジョン」を実行すること、また、当時 20 周年を迎えた日本庭園学会の今後として、日本庭園の地域性に着目した研究業績の顕彰・奨励と、日本庭園の国際性を見据えた学会運営でした。

地域性への着目については、学会開催地の選択や学会賞授賞業績にて顕在・顕彰が進み、それが反映されてきました。また、日本庭園の国際性については、平成 24 年(2012) 第 1 回北米日本庭園協会(NAJGA) 総会・研究発表会(デンバー、USA)への会員の参加と、相互連携協定の正式締結以後、様々に発展しています。学会活動を国際性に結びつける展開の一区切は、平成 29 年(2017)より国(国土交通省)の「海外日本庭園再生事業」が発足したことだったと思います。また、地域性では、平成 31 年(2019) 4 月に日本国内各地域の庭園すべてを対象として「ガーデンツーリズム登録制度(庭園間交流連携促進計画登録制度)」が創設され、国土交通省都市局公園緑地・景観課に日本庭園係が誕生したことが、現代社会に地域の庭が活かされることの端緒と捉えられます。

しかし、学会創立 20 周年に誓った「日本庭園学に関わる学際的な研究会、講演会、見学会などの企画とその案内、日本庭園に関わる研究実績をもつ研究者の発掘と学会へのお誘いなども順次実施させていただきたいと思えます。」は、まだまだ満足すべき段階ではありません。ましてや、「何にも増して研究会、見学会などの充実が重要です。」と描いた、専門家が集う学会から、一般市民に浸透した学会へはこれからです。現代市民社会において、普通に理解支援される「庭園学」。「庭園からの学び」、

「庭のよろこび」の理解の促進が庭園学の将来に必要なことと信じています。

学術対象の「庭園」の、生活感覚での市民社会での普遍化、言い換えれば庭の広義の福祉としての意味の理解の促進が将来課題であり、「庭園文化」という言葉が市民性を得て現代市民社会に根付くには、もう少し時間がかかりそうです。

その意味で、令和元年(2019)日本庭園学会賞が「アメリカ合衆国における雑木の庭から癒しの空間への展開」とした業績に授与されたことは、庭園の将来を見据えた意義ある授賞と考えています。庭園学の将来には、国際性・地域性に加えて、さらに一般市民社会への展開が希求されます。そして、このところ提唱している「シビック・ジャパニーズガーデン(Civic Japanese Garden)」のあるべき姿の普遍化が国際的にも地域的にも、そして現代市民社会においても近い将来に実現されることが望まれる、と思っています。

参考文献：

- Makoto SUZUKI(2018), Civic Japanese Gardens in Modern Japan, International Seminar on Japanese Gardens [Comparing, Understanding and Creating Japanese Gardens: A Dialogue between East and West], Kyoto University, Feb. 24, 2018
- Naoaki DONUMA, Makoto SUZUKI(2017), Civic Japanese Gardens: the gardens as regional resource and a place for community interaction. Journal of the North American Japanese Garden Association No. 4, p.68-72
- 鈴木誠(2016)、「日本庭園」象徴と実像 ～世界無形文化遺産とシビック・ジャパニーズガーデンからの考察～、造園修景 131、p.5-11
- Makoto Suzuki, Ko-Wei Chang Sanada, Naoko Makita, Naoaki Donuma(2016), UTILIZING CIVIC GARDENS IN JAPAN, NAJGA Conference 2016, Florida USA, Mar. 7, 2016
- 真田・張格瑋、鈴木誠(2015)、関東地域の現代公共日本庭園(Civic Japanese Garden)に関する利活用と運営に関する調査研究、平成 27 年度日本造園学会関東支部大会梗概集事例・研究報告集 Vol.33、p.104(ポスター発表、2015.11.22、日比谷公園緑と水の市民カレッジ)
- 鈴木誠(2014)、現代公共日本庭園(Civic Japanese Garden)の意義と役割、(公社)日本造園学会中部支部大会 中部支部大会研究発表要旨集 Vol.11, 13-14
- 鈴木誠(2010)、国際市民社会における日本庭園-庭園の市民化へ向けた“シビックガーデン”の展開、東京と緑 179 号、p.1(一社)東京都造園緑化業協会、2010.4

庭園学の将来

佐々木 邦博 (信州大学農学部造園学研究室 教授)

学生の時にフランスに留学していた時のことである。大学院のゼミで庭園の話題が出た。フランスではヴェルサイユ宮殿など王侯貴族が造った広大な庭園が有名だが、一方で都市郊外にはマンション街だけではなく、庭園がある戸建ての住宅街も広がっている。アフリカからの留学生だったが、自分の国では一般的に庭園はない、あるとしたら菜園である、と語った。庭園があるのは普通のことと思っていた自分に取り、そうではない地域があり、それが決して少なくはないことは衝撃的だった。

2000年に岡山後楽園で日中韓の庭園に関するシンポジウムがあった。韓国は隣国であり、東アジアの近い国と思っていたのだが、『「縮み」志向の日本人』を執筆し、韓国から来ていただいた李御寧先生が、韓国では屋敷に庭園を作るより、引退して景色の良い場所に移り住むことが好まれると語り、文化の違いに驚かされた。庭園とは、世界中に普通に存在するものではなかったのである。

庭園を考えていく上で、世界中で庭園が発展してきたわけではなく、庭園が古くから作られてきた地域は限られていることが興味深い。このことを前提にして考えていくと、日本の庭園の特徴なり魅力が改めて認識される。

また、庭園の内容や利用も様々である。祝宴の場であったり、花を愛でる場であったり、威厳を示す場であったり、眺める場であったり、語らいの場であったりするとともに、その時々により変化する場合もある。庭園の魅力は尽きない。

庭園を対象とする庭園学にとり、庭園の特徴や魅力を考えていくと、その多様性が重要となる。多様性を紐解くためには、多様な視点が必要であり、また、様々な学問分野からのアプローチが有効となる。

学際性が求められており、それが大きな役割を果たすことが庭園学の特徴と言える。

庭園学の将来の発展を考えると、今までの庭園研究の深化に加え、世界的な視野から日本の庭園を捉え直していくことが、理解や考察を広げていく上での一つの鍵となる。さらに今まで考えていなかったような様々な学問分野からのアプローチが、庭園学を深めていくための一助となるであろう。期待したい。



ヴェルサイユ宮殿

第14回日本庭園学会賞の募集のお知らせ

この度、日本庭園学会では、日本庭園や日本庭園に関わる研究に関する業績を顕彰するために、日本庭園学会賞を設けました。今年度は第9回の募集をおこないます。

審査の対象は、論文など学術に関すること、庭園技術や技能に関すること、庭園に関する著作等です。著作等には、映像や写真も含まれます。

応募締め切りは、令和2年2月28日（必着）です。なお、応募書類は返却しません。

この賞は会員ばかりでなく、会員の推薦する者も学会賞の対象者になりますので、庭園学の発展のために、自薦、他薦を含めまして、ぜひご応募のほどをお願いいたします。

令和元年12月

学術委員会委員長
藤井 英二郎

日本庭園学会賞 募集要項

1. (目的) 日本庭園およびそれにかかわる研究に関する業績を顕彰するため。
 2. (対象者) 日本庭園学会員または学会員の推薦する者。
 3. (対象) 学術：庭園に関する論文で、庭園学の発展に貢献した者。
技術：庭園に関する計画・設計・施工、維持管理・運営、遺跡調査、復元整備、修理等庭園技術および技能の発展に貢献した者。
著作等：庭園に関する著作、映像、写真等の業績が極めて優れていると認められた者。また、各種活動により庭園学の発展に寄与した者。
なお、他に奨励賞を設けることができる。
 4. (表彰) 総会で学会長が授与し、その内容を日本庭園学会誌に公表する。
 5. (応募) 授賞対象者は学会員または学会員の推薦する者とする。
推薦者は別紙に定めた「日本庭園学会賞推薦応募書」と選考に必要な資料を添えること。
- 応募書等の送付先：
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1
東京農業大学地域環境科学部造園科学科
ガーデンデザイン研究室気付
日本庭園学会総務担当
- 応募の締め切り：
令和2年2月28日（必着）
- 応募に関する問い合わせ先： 信州大学農学部
佐々木邦博
Tel & Fax 0265-77-1500（直通）
E-mail ksasaki@shinshu-u.ac.jp

【会費納入のお願い】

学会費の納入額をご確認のうえ、納入のほどよろしくお願ひします。また、過年度滞納の方は併せて納入のほどよろしくお願ひします。

協力者：森本純代・小椋菜美（植彌加藤造園株式会社）

日本庭園学会広報委員会

今江秀史、加藤友規

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-1

京都造形芸術大学日本庭園研究センター気付

日本庭園学会関西支部事務局 FAX(075)791-9342

